人・社会・地球

地球破壊の本質を探る

半谷高久

1　はじめに

私は環境問題が社会的に取り上げられるずっと以前から、人間が地球をどう変えていくかということを一つのテーマにしてやってきました。しかし、環境問題をいろいろ勉強すると、一般的に言われていることはどうも私の考えとあまり合ってない。たとえば自然科学系の人は科学技術が発展すれば、すべて環境問題を解決できるようなことを言いますし、社会科学系の人は、あまり明確なことは言いません。

そこで私は私なりに、なぜ環境問題が起こるのかについて少し整理してみようと思います。ここでは、今回私どもが書きました『人・社会・地球』（半谷・秋山著・化学同人、一九八九年）に述べた考え方の基本的なことをお話したいと思います。

2　環境問題克服へのアプローチ

ではどのようなプロセスで環境の問題を克服するかという大体の流れを図1に示しました。ものごとを解決する場合、環境問題に関わらず、どのような場合でも同じ

地球破壊の克服への道

環境破壊は基本的人権の侵害の一現象

事実をはっきり知る

事実の因果関係の解明

現在は断片的にしか解明されていない
従来の学問体系では無理である
自然科学と社会科学の総合が必要
人間とは、自然とは何か、価値観との関係

対症療法

試行錯誤の努力——未知への挑戦

長期的展望

哲学の役割の本質的重要性
人間の愚かさの認識

過信は思想の自由を奪い、社会を硬直化させる。全体主義社会の危険

柔軟な社会組織

社会の発展段階に応じた社会発展の指標の必要性

図1

ですが、まず現在どういうことが起こっているかを知る必要があります。今、環境問題、環境問題と言いますが、本当に何が起こっているのか、それを知ることが必要です。環境問題の現状を知るには、『特集・地球を守る』(日経サイエンス・一九八九年十一月号)や『地球環境報告』(石弘之著・岩波新書、一九八九年)などを推薦したいと思います。

しかしこれからどうしようかという時には事実を知ることはもちろん必要ですが、それを解決するには、ただ知るだけでなく、なぜそういうことが起こったかを理解しなくてはなりません。たとえばどうして地球の大気の炭酸ガスが増えたのか、あるいはなぜオゾンが減ったのか、そういう因果関係を知ることが必要です。ところが環境問題については因果関係は、はっきり分からないのが現状です。

今の環境問題がどうして起こったかを、うまく解析出来ないわけです。それはなぜそうなるかと言うと、従来の学問体系では無理なんです。たとえば東京の空気が汚れているのは自動車が排ガスを出すからだと言います。それで東京の空気をきれいにしようと思ったら自動車を止めようかということになる。自動車を止めると言っても、今止めれば生活は成り立たないわけです。したがって東京の空がなぜ汚れるかということを本当に理解しようと思えば、なぜ自動車が今は必要なのか、自動車を止められないのはなぜかということまで勉強しないと分からない。ですから今までの学問分野で言うと、我々のような自然科学の人も必要だし、社会科学の人の知識も必要だし、両方必要なわけです。

今の学問のあり方というのは、そういうふうではなくて、この人は社会科学だけやる、自然科学者は自然だけやるというのが主流です。それではいけないというので、段々とお互いに手を取り合って勉強するような方向には来ておりますが、なかなかそうはいかない。ですから何しろうまく説明できないという欠点があります。また環境破壊の現象を、いわゆる科学の力だけでうまく議論できるだろうかというと、そうはいかないんです。たとえば人間が環境破壊を起こしたんだから、昔の生活にもどった方がいいとか、あるいは自然が一番大切なんだから、自然を尊ばなくてはいけないという人もいます。段々そういうふうな考えが入ってきますと、一体人間というのはどういう存在かとか、自然とはどういうものだとか、そういう哲学的な考えやあるいは価値観が関係してきます。

また世の中をどう考えるかといった価値観が環境をきれいにしたり、汚したりする一つの因子にもなっているわけです。したがってなぜ環境がこのように汚れたかということを解析しようとすると、様々な問題が入ってくるわけです。

そこで問題の原因はよく分からないけれども、分かるまで放っておけない。それこそ理解できるのは何時のことか分からないので、理屈が分かってからものごとを解決するというようなことはできないわけです。分からなくてもやることはやらないといけないわけです。それを対症療法と言っているわけです。理屈は分からなくても、現在最も理想的と考えられることをやらなくてはならないわけです。待っているわけにはいかないんです。待っているということは何もやらないことですから、どんどん事態は悪化するばかりです。

ですから試行錯誤と書きましたが、分からないことなんですから、それで失敗したっていいんです。失敗を恐れては解決はできないと思います。しかし対症療法をして失敗したということによって、新しい療法が分かる可能性がでてくることもあるわけです。ですからお医者さんの場合でもある薬を患者さんにあげてみて、それが効かないということが分かれば、次の新しい薬を使う。何もしなかったら手の打ちようがないわけですから、何か

やってみるということは、新しいやり方を発見する道です。ですからその意味では失敗したって構わない。今の人はあまりにも能率のことばかり考えすぎるんです。もともと無駄がほとんどで、その内ほんのちょっとが真理ですから、無駄を恐れるようではとても現実の問題の解決やそのための学問はできない。難問は解決できないわけです。

環境問題は人間の歴史が始まって以来、初めて出くわした困難な事件なんですから、いくら昔の人の書物をたくさん読んでも、おそらくいい答えは出てこない。ですから昔の人の言うことを勉強するのは結構ですが、昔のどんな偉い人でも、私は現在に対する解決策というのは持っていないと思います。ですから自分が考えなくてはいけないわけです。

今まで我々が習ってきたのは、何か答えというのは初めからあって、不勉強だから答えを発見できないんだというふうな気がしているんです。確かに不勉強もありますが、新しいことに対しては、自分が答えを出さなくてはならない。そういう習慣が必要です。

そこで対症療法は必要ですが、それだけでいいかというと、やはり長期的な展望が必要になる。たとえば人間の未来をどう考えるかとか、未来社会をどういうふうに設計していくかという場合には、どうしても長期的な展望を持たないと困る。長期的な展望を持つ場合には、やはり哲学的なセンスと言いますか、哲学的な展望というものが必要です。ですから今回書きました『人・社会・地球』は、宇宙ができるところから始まるわけです。一応の歴史はあるわけですから、たとえば百何十億年前の歴史から、現在に至るこの流れを見て、過去にあるそういう流れを背景にして、将来はどうなるだろうかという展望をつくるわけです。過去を背負って現在があるわけです。

ですから過去から現在に向けてどういうことが起こったかということによって、現在から未来にどういうことが起こるか、という考え方が必要になる。将来は何も単なる現在の延長というわけではないんですが、過去を無視して現在もないし、現在を無視して将来もないということです。

長期的な展望をするのに考慮しなければならないことがあります。必ず人間の知識は不完全ですし、いつでも間違いをしているわけです。そういうことを前提にして展望を作らないと、これはとんでもないことになると思うんです。

展望をつくることはいいんですが、その展望がどのくらい正しいかどうかということは、実際の歴史と照らしあわせながら検討していかなくてはならない。したがって人間の不完全さと言いますか、人間というのはそれほど頭が良くないということを前提にして展望をつくらないと、これは人間社会を破壊すると思います。それはどういうことかというと、物事をするのに信念を持ってやることは必要なんですが、自分の言っていることが絶対正しいと思うと、他人が馬鹿に見えて、他人が敵に見えてくるんです。

極端に言うと自分が一番正しいんだから、違った思想の人は存在価値がない、そういう論理になるわけです。そうなりますと思想の自由を奪ってくる。人間が愚かであるにも関わらず、始終間違っているにも関わらず、自分が常に正しいということを前提条件にして社会を設計していきますと社会は硬直化するわけです。それこそ全体主義的な社会に陥る危険があります。

そこで私は柔軟な社会組織というものが必要だろうと思います。ある特定の制度とか、そういうものを決めてしまって、それが一番いいと言うのではありません。たとえば人間社会が発展していくうちに、特に科学技術が発展していくと、社会制度というのは、それに応じて柔軟に変えられるようにしておかないと、すぐに硬直化してしまいます。したがって信念を持つことと柔軟であることの矛盾をどう克服するか、これは人間の問題だと思います。

社会でも子供の発達と同じように、赤ん坊の時の発達の状態の時と、青年の状態の時、もう少したった時代、たとえば社会の人口が十億の時、二十億、五十億、あるいはコンピューターができる前、できてから、あるいは宇宙旅行ができるようになる、それぞれのいろいろな社会の発展状況に応じて、それぞれに適した社会制度があるというふうに私は考えています。

3　環境問題の起こるメカニズム

図2はどのようにして環境問題が起こるかということを非常に簡単にしたモデルです。環境問題というのはどういうことかと言いますと、人間社会が地球環境に働きかけて、地球を変えると、それが今度人間社会に悪い作用になって現れる。たとえば空気が一番いい例です。自動車で排気ガスを出して、その排気ガスを吸って人間の健康が害される。そういうふうに自動車が走って、それが害になる。ここで一次的変化、二次的変化と書いてあるのは、人間が引き起こすある変化(一次的変化)が次に自然のメカニズムで自然が変化する(二次的変化)ということです。

たとえばオゾン層の破壊というのがまさにその二次的変化ですね。人間が空気中にフロンガスを出すとそれが空気中に含まれるようになる。これが一次的変化です。今度はフロンガスに太陽光線があたって、フロンガスが分解して、そのときできた塩素がオゾンに作用する。そしてオゾンが減っていく。これが二次的変化です。そしてそれがまた人間に害作用をする。このメカニズムをしっかり勉強することは難しい。

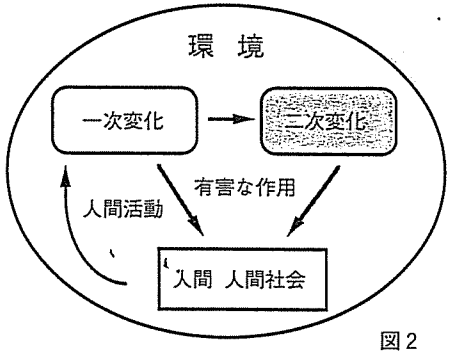

図2

また別の例を言いましょう。自動車の排気ガスが出る、排気ガスが出るということが一次的変化なんです。これが光化学スモッグの原因になる。あるいは酸性雨の原因になる。酸性雨が土壌を酸性化するとか、森林を破壊させるとか、あるいはヨーロッパでは湖の中の魚を死滅させてしまう。

このように自動車の排ガスが出るということだけを考えても、これは人間が直接手を下して自然を変化させたわけです。それが様々なところへ波及していくわけです。

それは自然界だけでなく、社会にも影響を及ぼすわけです。たとえば自動車の排ガスによって健康が害されるということで、自動車の排ガス規制をどうするかとなります。そして自動車の排ガス規制をしたということが、エンジンの改良を促し今度は日本の自動車産業を発展させることになる。さらにそのために日米の経済摩擦がおこる。このように次々といろいろな連鎖があるわけです。これを全部うまく解釈しようというのは実際にはなかなかできません。しかしこういうふうに巡り巡って環境破壊も起こっているわけです。

4　環境破壊の社会に対する影響

一次的変化と二次的変化ということをもう一つ別の例でお話しましょう。最初にご紹介しました『地球環境報告』にあった話を念頭において図3に整理したものです。南方の国には森林がたくさんあった。今、森林を守ろうとしていますが、発展途上国は外貨を稼ぎお金を儲けるためにどうしても木材を売る。

そうすると日本は紙をたくさん使うし木材も使うから、南方の木材を買うわけです。そして自分の国は環境保護だと言ってなかなか木を切らない。自分の国の森は切らないで他の国の森の木を切ってくるわけです。それが一次的変化、まず最初に人間が手を加えた地球に対する変化です。

森林が破壊されて木がなくなってくると、雨が降れば洪水のようになるわけです。したがって上流に森林があ

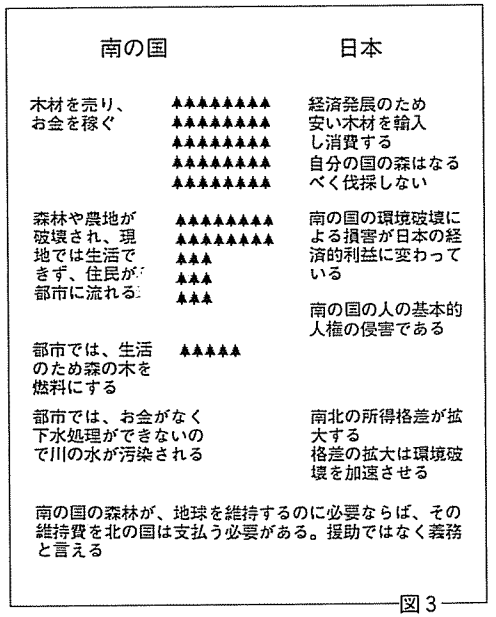

図3

ったようなところでは、下流の農地が破壊されて、南の方では農業ができなくなるわけです。またいわゆる森の中で生活していた人は森から追い出されてしまう。どこへ行くかというと都市へ行くしかないわけです。それで南方では大都市ができていくわけです。森が切り開かれるだけが原因ではないと思いますが、何しろ都市にはどんどん人が集まってくる。今度は都会で人が生活するようになると、燃料が高く、また経済力がないから石油がなかなか使えない。そこで都市を囲んでいるような森の木を切って生活する。そしてますます都市の周辺の木はなくなっていくわけです。

結局、日本が直接やったことは南の国から木を買うということだけですが、その連鎖反応として南の国の人の生活を逆に悪くしているんです。反対に日本は何を得しているかと言うと、結局日本国内ではとても買えないような安い値段で南方の国の木を買う。したがって日本は経済的には利益を得ている。その利益はどこから来たかというと、南の国の人の方が環境破壊による損害を受けることによって、その損害を受ける分が日本の経済的利益に変わっているわけです。

別の角度からみると、結局日本は南の方の森林を切るということによって、南の人の方の基本的人権を侵害しているとも言えます。これは水俣病の場合と同様で、工場から工場排水が出て、水俣湾に住んでいる漁師さんの命を奪った、これは基本的人権の侵害です。直接手は下さないけれども、自然を通して人の人権を奪ったわけです。それと同じことを今日本は南の方の国に対してしているわけです。

ですから地球の環境破壊というのは、やはり環境を汚しているだけではなくて、その環境が汚れたために人が住みにくくなるわけですから、他人の基本的人権を侵害しているというふうにとらえるべきです。ですから環境破壊というのは自然科学の人がただこうなった、悪くなったというだけじゃなくて、環境破壊が起こったことによってどれだけ本来もっている人間の利益が失われたか、そういうふうな両面から環境破壊というのは解釈しなくちゃいけない、それが今はなかなか行われてないと思うんです。

それからさらに言いますと、南方の貧しい都市ではお金がありませんから、たとえば下水処理設備ができない、そのために川の水がどんどん汚れていきます。そしてますます貧しいところは貧しいが故に環境が汚くなる。このことはもう少し詰める必要があると思いますが、世界のたとえば南と北の国の格差が広がれば広がるほど、南の国の方の環境の破壊は進むようです。所得を上げようとしてどうしても無理をしますから、どうしても自然の破壊を代償にしてしまう。

たとえば工場を誘致する場合でも、日本であれば工場の排水規制がうるさいから、排水処理にたくさんお金がかかる。ところが南へ行けば安い。排水処理の基準がそう厳しくない。あってもうやむやにしてしまうとか、まあ実際はいろいろ問題は起こっているでしょうが、とにかく安い。そうするとどうしても工場は南方へ行って建て、そしてそこで水を汚してしまう。南の国の所得は一応少しは増えるかも知れませんが、環境破壊によって起こる自然の価値の減少によってますます所得格差は広がることになります。ですから南北の所得格差が広がるということは、環境破壊を促進させる一つの要素だと思います。

では一体南北の所得の格差は将来どうなるのか。アメリカで『西暦二〇〇〇年の地球』(家の光協会、一九八一年)という予測の本が出ました。それがどのくらい正しいか分かりませんが、やはり紀元二〇〇〇年になれば、南北の所得の格差は拡大するという予測でした。普通我々が経済に対して抱いている期待というのは、経済が発展すれば富める人と貧しい人の格差が狭まるというのが一つの夢であるわけですが、それは今の体制では無理なんです。南北の格差も広がってくる。

5　環境に対する責任

それからこれは私は特に言っておきたいんですが、日本人は特に南の方の国の森は大切だと言います。しかし大切だ大切だと言っておいて、その保管を南の方の人に任せるというのはずいぶん虫のいい話だと思います。また南の国なんて大袈裟なことは言わないでも、沖縄の石垣島で空港をつくるという例があります。珊瑚礁が破壊されると言うことで自然保護団体の人が反対していま

す。

私は珊瑚礁を保護するのももちろん結構だと思いますし、また石垣島に空港をつくることも結構だとおもいます。そこで考えなければならないことは、もし石垣島の珊瑚礁が本当に日本にとって必要であり、また世界にとって必要ならば、世界中の人が保護するために手を差しのべるべきだと思います。

単純に空港はつくってはいけないというのでは、沖縄の経済的な発展はできないと思います。ですから本当に珊瑚礁が必要ならば、その維持費と言うか、管理費を我々が出さなくちゃあいけない。それと同じことです。たとえば南の国の森、ブラジルの国の森をそのまま残すことが必要であれば、何もＯＤＡ(政府開発援助)とかでブラジルを援助するなどと恩きせがましいことは言わないで、そのブラジルがアマゾンの森林を保管する費用を、世界中の人が、特に今の先進国の人は負担すべきです。援助じゃなくて、我々の義務として考えたらいいと思います。ですから本当に自然保護をするのであれば、その自然保護をするために経済活動が制限されている人に別の経済活動の間口を開くか、あるいはその管理をすることによって、その人々が豊かな生活ができるようにお金を支出すべきだと思います。

6　環境破壊の真の原因―システムは馬鹿正直

次が結論なんですが、今の環境破壊が起こった本当の原因とは何なのか、について話をしたいと思います。図4にシステムは馬鹿正直と書いてあります。システムとは何かというと、なかなか難しいんですが、一つの働きをするまとまりみたいなものをシステムというふうに考えます。ここで馬鹿正直というのは、人間がその一員であるシステムは人間が何かをつくろうとする場合には、そのつくろうという方向に発展、進歩するということです。

現在我々は様々な経済システムをつくっています。たとえば資本主義社会や社会主義社会があります。そういう社会制度をつくって、そしてそれぞれ社会の発展をめざしているわけです。ですから社会制度というのも一つのシステムになります。そうすると今の社会制度は何を目標にして設計しているか。あるいはこの社会が発展したか発展しないかということをどういう尺度で計っているかということを考えてみると、いわゆる経済生産の発展がその尺度になっているわけです。つまり経済的な生産力が拡大するということが社会の目標です。社会の制度をそれに適合するようにつくっていっているわけです。こういう経済生産が目標の社会を、私は生産志向型社会と名づけています。それは今の資本主義もまた社会主義制度も同じだと思います。

システムは馬鹿正直

システムは設計された目標に向かって発展する

経済生産が目標の社会　生産指向型社会

現在のいわゆる資本主義社会と
いわゆる社会主義社会の性格

環境保全が目標　環境指向型社会

生産指向型社会も環境指向型社会も人権侵害
の危険性を持つ

人権尊重が目標　人権指向型社会

生産力の発展も環境の保全も人間社会の
発展の手段として位置づける

手段と目的の混同が地球破壊を招く

図4

システムは馬鹿正直とは、たとえば人間がそういうふうな経済生産を最大に発展させようと思って社会をつくると、その社会はどんどん経済生産が発展できるように社会の形態が変わってくるということを意味しています。必ずしも目的に到達出来るかどうか分かりませんが、その方向に社会は進んでいくわけです。ここで重要なことは、そのために人間性が失われても仕様がないということです。こういう社会設計をすればそうなるんです。それをシステムは馬鹿正直だと私は言います。ですから経済が発展すれば、自動的に人間性が保証されるなどという、そんな虫のいいことをシステムは考えてくれません。

7　環境問題解決のために―基本的人権の尊重

経済生産を最大にしようとする社会システムを設計を

すれば、その社会はそれに向かって突進しますから、そのために少しぐらい人権の侵害があっても、非人間的なことがあってもかまわないことになるんです。しかし人間はそれでは困るというので、法律があって、基本的人権を守るとか、あるいは非人間的なことに対しては何らかの手を打って、そのシステムが生産志向型社会として暴走しないようにします。

しかし私はそれは手段と目的を混同していると言います。人間の基本的人権は何か、これはうるさい問題があります。ここではその問題は少し置きまして、人間が生きているからには人間の基本的人権が尊重されるということを社会目標にすれば、そのためには科学技術も発展させなくてはならないし、また経済力も発展させなくてはならないとしても、こういうシステムであればいくらその社会が発展しても非人間的な社会はつくられないはずだと思います。

しかし今は生産が増せば、欲しいものが得られれば、自動的に人間は豊かな生活をして、人間性が保証されるんだと考えている。しかしシステムというのはそんな甘いものじゃない。まず基本的人権を尊重するという大目標を設定して、それが達成されるために科学技術を発展させる、社会制度をそれに合うようにする。それが本来の社会の目標じゃないか、と思います。したがって今までは手段と目的の混同があったというわけです。経済学者はこれをなかなか理解してくれないかも知れないんですが、経済発展というのは社会の手段です。それが本末転倒して、お金を儲けること自体が目標になると、手段と目的との混同です。今の社会というのはそれに近いんです。

なぜ今までそれで済んできたかというと、経済生産力の少ない昔には、経済生産力が増せば、自動的に人権はより確保されていったわけです。今の開発途上国で経済発展、経済発展と指導者が叫ぶのはそのためです。そういう社会の発展状況がまだ貧しい時は、経済生産を発展させるということと、そこに住んでいる人の基本的人権をより向上させるということにそれほど矛盾はなかった。これは好意的な解釈に過ぎるかも知れませんが、社会の発展段階が低い時には、生産志向型社会でもそれほど矛盾はなかったと思うわけです。

ところが今の北の国、先進国ぐらいの経済発展の状況になると、今度は経済発展が人間性を否定する面がたくさん生れる。たとえばサラリーマンで有能な人ほど子供と晩飯が食べられない。何のためにお父さんは働いているか。子供の顔も見ないで、お父さんはお父さん、子供は子供で暮して、家庭というのは成り立たなくなってくる。奥さんは子供を自分で教育するより学校の先生とか塾に行かせて人に教育してもらって、自分は家でテレビを見てるなんてちょっとおかしいと思います。ですから経済発展のため分業が発達することもいいですが、何か目的と手段が変わってしまっている。

さて私は特に今環境を保全することが必要であると思います。たしかに今までのような経済一本では環境が破壊されるから、環境保全が必要です。しかし先に述べたように、環境を保全すれば自動的にいい社会ができて、基本的人権が守られるかというと、そう簡単にはいかない。

科学技術が発達しすぎたために環境破壊が起こったんだという人に対しては、私は次のように言います。それは表面的に見れば科学技術がこんなに発達しなければ核戦争もない、化学物質による汚染もない、それは確かなんです。しかしそうは言っても科学技術をストップさせたら、一体地球上に何人生きられますか。十億人は無理かも知れない。昔の制度に戻したら五億人も無理かも分かりません。それは環境はきれいになるかも知れないけれども、そのために四十億人の人が餓死していいのか。環境をきれいにするということを第一目標におくと、またそのために弱いものいじめが起こるわけです。たとえば工場の排水基準を厳しくすること自体は非常にいいことです。

しかし、たとえば非常に小規模なメッキ工場みたいな場合には、急に工場排水の規制を厳しくしたらその会社はつぶれてしまいます。大企業ならいろいろやりくりして、排水処理設備をつくるわけです。しかし中小企業に同じような基準を適用したら、その人の命を縮めるようなものです。確かにいいことでも適用の時期を誤ると弱いものいじめになってしまいます。ですから環境をきれ

いにするというのもいいんですが、これがいいことだから何時でもやっていいかというと、そうではないということです。

私も昔は生産志向型社会というものから環境志向型社会へと言ったんですが、私は最近その間違いを悟ったんです。たしかに今までは経済生産一本槍すぎたから、環境をもっときれいにするということも必要だけれども、その前にやはり我々が住んでいる社会の人権を守るということが第一番なんです。

人権が守られるというのは、非常に抽象的な表現です。そこでなぜ抽象的な表現を使うかと言いますと、具体的にこうだと言うと、思想の自由を奪うというのが私の考えなんです。たとえば、大分前の話ですが会社の幹部に、社員が人間らしく暮らすようにしたらどうですかと提案したら、人間らしく暮らしたら会社はつぶれてしまうと言われてしまいました。

人間らしく暮らすというと、遊びたい時に遊んで、出勤したい時に出勤する、それが人間らしいと言われれば困ると言うわけです。私は猛烈社員だって自分が好きでやっている時は、実に人間的に暮らしていると思うんです。ですから基本的人権の尊重というのはどういうことですかというと、一つ一つ具体的に言ったら間違ってしまうんです。ケースバイケースです。ですからあまり抽象的な表現は分かりにくいと言って、具体的にすると誤解が起こる。しかしそれをあまり抽象化しすぎると、何をやってもこれは基本的人権の尊重だと言われても困るんですが、その辺のところはそれこそ場合場合によって具体的な行動は違うわけです。

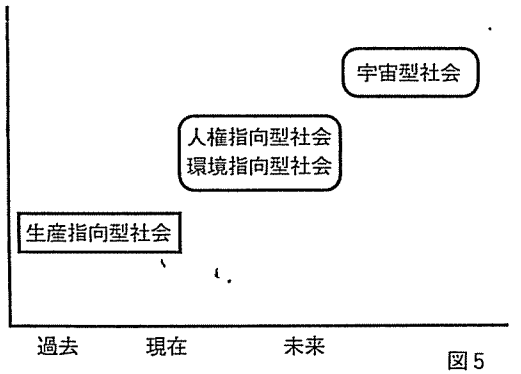

図5

そこで私は昔の人が悪いとは言いません。昔の人が手段と目的を混同していてもそれは一応良かったんだ。何しろ生産力の低い時には、人権の尊重を目標にしようが、生産力の拡大を目標にしようが、それほど矛盾はなかった。しかし生産力がだんだん拡大するにつれて、その矛盾が明らかになってきた。それが現在の環境破壊であり、基本的人権の侵害という現象になって現れた。ですからそういう根本問題を無視して、環境に関する科学技術を発展させて、それで解決できるなんて、そんな生易しいものではない。根本を知らなくてはいけないわけです。

8　未来への展望

最後にもう少し将来への展望として、どういうふうな見通しや展望をたてるかということを図5に示しましたので、それについて話をしたいと思います。産業革命以来の百数十年間は生産志向型社会で、これはものをたくさん生産すれば幸福になれるというふうな幻想を抱いて社会設計をしてきた時代です。この次に来るのは、環境志向型社会や人権志向型社会だろうと思います。環境をきれいにするということが現在では直接人権志向にかなり密接に関係しますから、生産に対して環境という言葉を使ったんですが、環境志向型社会と人権志向型社会とが渾然としている社会を待望しています。

その先はよく分かりませんが、地球人だけじゃなく宇宙人と交際するようになれば、宇宙型社会というのがありえるということです。これは具体的なことは何も分かりませんが、こういうふうなスケールで展望をしています。

社会というシステムで、人間は必ず発展するのだと言う人がいますが、そんなことは嘘です。私だって明日交通事故で死ぬかも分からないんです。ですからシステムというのは何時ポカンとこわれるか、それは分からないんです。

何年か後に地球で核戦争が起こったり、大隕石でも衝突すればそれでおしまいですから、そんなことは分からない。本当のことは分からないんだけれども、見通すことは必要である。しかし本当のことを予測できたら生きてる楽しみはなくなります。何年何月何日に死ぬことが

分かっていれば、これはどうも精神衛生上良くないと思います。

結論を言えば、環境問題を解決するには地球破壊の元凶を技術が悪かったからとか、社会制度が悪かったからと言うよりも、根本の社会設計の目標をもう一度我々が自分で考えてみる必要があります。そうすれば、解決策が見えてくるのではないでしょうか。

参考文献

半谷高久・秋山紀子著『人・社会・地球』（化学同人ＫＫ出版、一九八九）。

〔付記〕本稿の内容は基本的には上記書の内容の一部を要約したものであり、一九八九年十一月十六日に行われた講座「環境破壊と人類の未来」の第二回の講演内容を収録したものである。詳細は上記文献を参照されることを希望する。

（はんや　たかひさ・東京都立大学名誉教授）